

二〇二二年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(三回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から , 3 ページから 18 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ ① 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

わたしたちの日常の経験のなかでは、ものは、観察者がどの位置に立つかによって、あるいは明るさとか光の当たり具合によって、またその人がそのときどういう気分であるかによって、それぞれ違ったように見えます。近代の自然科学的なもの見方は、①厳密な科学を打ちたてるために、そのように視点や状況じょうきょうによって変化する一時的なものを真理の領域から排除はいじょしました。ものが、見る視点によって円形になったり楕円形だえんけいになったり長方形ちやうけいになったりすれば、他の人といっしょにこのものについて語ることができなくなってしまう。ものの真の姿は、そういう視点や気分きぶんに左右される一時的な現れのなかにはなく、それらをすべて取り除いたところにあると②考えたわけです。

わたしたちがものを見る場合には、視点が決定的な意味をもっています。たとえば同じ長さのひもでも、近くに置いてあるものは長く見えますし、遠くに置いてあるものは短く見えます。科学という学問が成立するためには、その二つのひもが同じ長さであるとされなければなりません。そのために科学は、特定の視点にはまったく左右されない、どの方向からもものが均一に観察されるような、言わば無視点的な空間、均等に無限に広がる三次元空間*1を想定したのです。そしてすべてのものをそのなかに置き直すということをしたのです。もちろん、わたしたちはこの無視点的な三次元空間のなかに置き直されたコインやひもを実際に見たり、触さわったりすることはできません。しかし、科学はそのようなものを想定することによって、ものを見たり、観察したりする主体しゅたい(主観)の影響えいきやうをまったく受けない、もの本来のあり方を把握はあくしようとしたのです。

このように自然科学的なもの見方は、③わたしたちが見たり、聞いたりするものの背後に、そのときどきの視点や気分きぶんに影響えいきやうされない「ものそのもの」、「ものの本体」とでも言うべきものを想定しました。(中略)そうすることによって、わたしたちは実際、わたしたちの経験を④うまく説明することができます。たとえば、わたしが移動し視点をずらすことによって、同じコインが楕円だえん

に見えたり、円形に見えたり、長方形に見えたりするわけですが、それにもかかわらず、わたしが、あるいは周りにいる人も含めた全員が眺めているコインが同一のものであるということを、この「ものの本体」を想定することによってうまく説明できます。

しかもこの無視点的な三次元空間のなかに置き直されたものは、そのときどきの見え方（近くにあるものは大きく見えるが、遠くにあるものは小さく見えるといったこと）には関係なく、誰が測っても同じ長さ、同じ重さになります。つまり、それについては共通のAシヤクドで計ることができません。すべての人がそれについて共通の土俵の上で語ることができるのです。したがって対象となるものが何であるかを、多くの人と一緒にいっしょになって解明していくことができます。近代の自然科学が大きく発展したのは、そのように「ものの本体」について共通の土俵の上で語ることができたからです。

しかし、自然科学的なものの見方には問題点もあります。それはわたしたちの世界を二つに分けてしまいました。現象の背後にある、「もの」それ自体の世界と、わたしたちが見たり聞いたりするところに成立する現象の世界です。

すでに述べましたように、わたしたちはわたしたちの視点からものを見、それをさまざまな仕方で受けとっています。その背後に共通の根拠があると考えることは、⑤十分に意味のあることです。しかし問題なのは、一方が「もの」そのものの世界として、わたしたちの外にある客観的な世界として位置づけられ、他方が、それをそのときどきの仕方で受けとった主観的な世界として位置づけられた点です。

前者は、わたしたちとは関わりなく存在している「外部世界」として、そして後者は、それをBヒヨウシヨウする「意識」の世界として、二つの性格を異にした世界だと考えられるようになりました。そして⑥前者は、わたしたちの知覚を可能にしている共通の根拠ですから、それこそが第一次的な存在であり、それに対して後者は、それをそれぞれの視点から「主観的」に、あるいは「私的」に受けとつたにすぎないものとして、第二次的な存在として位置づけられました。

(中略)

自然科学的なものの見方は、そういう「私的」であやふやなものを取り除いていけば、誰からも同じように観察できる「ものの

本体」だけがそこに残されると考えます。そうすれば、わたしたちのそのときどきの視点から見えるものの見え姿に惑わされることなく、ものを「客観的」に把握することができると考えるのです。

しかしわたしたちの、何かを見て美しいと感じたり、何かを食べておいしいと感じたりするといった具体的な経験について見てみますと、そこでは客観的な「ものの本体」と、その一時的な現れというように、二つのものが別々のものになっているでしょうか。

たとえばリンゴを食べておいしいと感じたときのことを考えてみましょう。無視点的な三次元空間のなかに置き直されたリンゴそれ自体には「おいしさ」はありません。わたしたちがそれを実際に食べ、味覚が刺激されてはじめて「おいしさ」が生まれます。そのため、自然科学的な見方は、わたしたちはわたしたちの「私的」な世界のなかで、つまり意識のなかだけで、「おいしさ」を感じていると言います。しかし、わたしたちはほんとうに外の世界から隔たった意識の内側で、そのなかだけでおいしいと感じているのでしょうか。

リンゴのおいしさの原因になるのは、リンゴのなかに含まれるペクチンやポリフェノールやリンゴ酸などだと考えられます。そうした物質や、それらが味覚を刺激するということが一方に考えられます。そしてその刺激を受けとめて、わたしたちは「おいしさ」を感じます。この二つのことはまったく別の世界に属することとして考えられるべきでしょうか。わたしたちが「おいしい」と感じるのは、外的な世界から隔てられた意識の内側だけで起こる出来事でしょうか。むしろリンゴを食べることが、そのまま「おいしい」という出来事なのではないでしょうか。つまり、リンゴのなかに含まれるペクチンやポリフェノールがおいしいのではないのでしょうか。簡単に言えば、リンゴがおいしいのではないのでしょうか。

(中略)

ものは単なるものとしてではなく、最初からたとえばわたしたちにおいしさを覚えさせるものとして、あるいはわれわれに恐怖を与えるものとして現れてきています。そこに二つの世界の隔たりはないのです。わたしたちの世界を、「もの」それ自体の世界と

現象の世界に分けてしまうと、このわたしたちが具体的に経験していることがとらえそこなわれてしまうのではないのでしょうか。

たとえばわたしがいま、われを忘れてピアノの美しい調べに聞きほれているような場合のことを考えてみましょう。その場合、そこにまさにその調べの美しさが出現しています。その美しさを説明しようとして、ピアノの響きを空気の振動に還元し、その振動が聴覚を通して脳に伝わってわたしたちはピアノの音をピアノの音として認識しているのだと言うと同時に、その調べの美しさは雲散霧消してしまいます。わたしの経験のなかにあつたリアリティがまったく失われてしまうのです。

わたしたちはまさにこのリアリティのなかで生きています。それがわたしたちの生を作りあげています。それがわたしたちの生活のいきいきとして張りのあるものに、また豊かなものにしていくのです。そこでこそわたしたちは生きる意欲を喚起されます。わたしたちが生きる意味を感じ、生きがいを見いだすのも、そのような世界においてのことです。

そのような私たちの生の営み、そしてそこで感じられる生の充実は、たしかに移ろい、変化するものです。変わることなく、ありつづけるものではありません。また、人によっても受けとり方が異なります。しかし、そうだからといって、それはあいまいなものとして真理の領域から排除されるべきでしょうか。むしろ、自然科学が明らかにしてくれるさまざまな知見も、そのような私たちの生の営みに関係づけられて、はじめて意味をもってくるのではないのでしょうか。

(『はじめての哲学』 藤田 正勝)

〔注〕 *1 三次元Ⅱ縦・横の平面に奥行がプラスされた空間など。

*2 リアリティⅡ現実味・現実性。

問一 ―線A「シヤクド」・B「ヒョウショウ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画でいねいにはつきりと書くこと。)

問二 ―線①「厳密な科学」とありますが、これはどのような学問だと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア

くオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その時々々の条件や環境かんきょうによって現れる情報をできる限り平均化していく学問。

イ 研究者の期待や希望を一切取り除いたところに現れる真実のみを追っていく学問。

ウ 誰だれに対しても分かりやすく理解を得られるような答えを示していく学問。

エ 過去に判明した事実を現代の発達した科学力で更さらに塗ぬり替かえていく学問。

オ 何物にも左右されることのない絶対的な事実をどこまでも追究していく学問。

問三 ―線②「考えたわけです」とありますが、この部分に対する主部として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わたしたちの日常の経験

イ 観察者

ウ 近代の自然科学的なものの見方

エ 他人

オ ものの真の姿

問四 ―線③「わたしたちが見たり、聞いたりするもの」とは何ですか。これを端的たんできに表現している本文中の一単語を探し、抜き出ぬきなさい。

問五 ―線④「うまく説明することができます」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一度に多くの人が同じ物を観察することができるので、説明にかかる時間を短縮させられるといふこと。

イ 対象を見ている人全員が同じ物を見ていると認識できるので、説明をする上で都合がいいといふこと。

ウ 観察者全員に様々な角度から同一の物を示すことができるので、説明が上手になるといふこと。

エ 誰もが知っている物として対象を提示できるので、説明内容に現実味が生まれるといふこと。

オ リアリティをもって大勢に説明できるので、より具体的な説明が可能になったといふこと。

問六 ―線⑤「十分に意味のあることです」とありますが、どのような点において意味があるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日常生活を送っている空間とは別に、自分たちの視点に左右されない空間の存在を発見したといふ点。

イ 多くの人が話し合いに参加しやすい環境を整えることにつながり、近代科学の成立を助けたといふ点。

ウ わたしたちが認識している世界は、主観的な世界と客観的な世界から成立していることを示したといふ点。

エ 対象となるものが発信している意味に関して、近代以前よりもいっそう説明しやすくなったといふ点。

オ すべての人が同じ条件のもとで対象を語ることができ、そのことが科学の発展につながったといふ点。

問七 ―線⑥「前者は、わたしたちの位置づけられました」とありますが、「前者」及び「後者」はリングの場合どのようなことがあてはまりますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア リングには味覚を刺激する物質が含まれているといふこと。

イ リングを見ると食べたくなってしまうといふこと。

ウ リングは誰にとってもおいしく感じられるといふこと。

エ リンゴを食べておいしいと感じるといふこと。

オ リンゴに含まれる成分を分析するといふこと。

問八 本文の内容を説明したものととして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学は無視的な三次元空間を想定したが、現実の世界との間で混乱が生じた。

イ 科学的な考え方のもとでは、わたしたちのその時々の主観は徹底的に排除される。

ウ 科学的に説明されたリンゴは、誰が食べても同じおいしさのものととして認識される。

エ 科学は人類にとっての真実を追究することで、人々のよりよい人生に貢献している。

オ 科学と我々の生の経験は相いれないのだが、共通の土俵を作ることによって両者を融合できる。

問九 〓線「自然科学的なく分けてしまいました」について、筆者は「自然科学的なのもの見方」が「わたしたちの世界を二つに分けてしま」ったことの問題点をどのようなことだととらえていますか。五十字以内で説明しなさい。

〓 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

弟は生まれつき耳が聞こえなかった。だけど、そのことと、僕がこの場所で歌い続けていることとの間に、一体どういう関係があるのか。僕は未だにその答えを見つけられずにいる。

いつもと同じ時間、いつもと同じ店のシャッターの前で、僕は黙々と路上ライブの準備を進める。吐息は白く、手袋越しにマイクスタンドの金属の冷たさが伝わってくる。ボディに細かい傷がついたアコースティックギターを取り出し、ペグを締め*₁てチューニングする。顔を上げると、水銀灯の淡い青の光の向こうに、藍*₂がかかった夜空が広がっていた。帰路を急ぐ人々が寒さに背中を丸

め、足早に僕の目の前を横切っていく。目をつぶって、まぶたの裏に浮かぶ光の名残を一つ一つ数えてみる。全部で三つあった光は、数えているうちに少しずつ小さくなり、姿を消す。僕は深く息を吸い込んだ。冷たい空気が肺の中に満ち、身体がかすかに震える。ギターのネックを握りしめる力を強める。ゆっくりと息を吐き出し、僕は最初のコードをかき鳴らした。

弟の聴覚障害が発覚したのは、庭の向日葵が咲きほこったある夏の日だった。病院から帰ってきた母親と父親の表情は暗く、父親に抱きかかえられた三歳の弟だけが嬉しそうに顔をほころばせていた。お帰りなさい。僕がそう言おうとしたその時、母親は右手に持っていたカバンを壁に投げつけ、大声で奇声をあげた。そのままテーブルに置いてあった写真立てをなぎ払い、タンスの引き出しを片っ端から引きずり出してはそれらを床に叩きつけていく。

僕と父親は母親を止めることもできず、①ただ黙って見守ることしかできなかった。母親はひとしきり暴れた後、手で顔を覆いながらその場に崩れ落ちる。外から聞こえてくる蝉の鳴き声に混じって、しゃっくりのような母親のすすり泣きが部屋にこだましていた。それから母親はぼつりと、「産まなきゃよかった」とつぶやく。胸がざわつき、僕は弟へと目を向けた。目が合った弟がにこりと笑ってみせる。弟は母親のそんな言葉でさえ聞くことができないという事実を知ったのは、それから数時間経ってからだった。

かじかむ手でギターの弦をかき鳴らす。お世辞にも上手いとは言えない歌声が夜の街に溶けていき形を失っていく。歌声に混じる白い息が夜空に吸い込まれていく。寒さで手の感覚がなくなっていく。指がもつれて、一瞬だけコードを間違えてしまう。それでも、手の動きは止まらなかった。何度も何度も繰り返した曲は身体と指先に刻み込まれていた。いつもと同じように、立ち止まって歌を聞いてくれる人は一人もいない。ちらりと一瞥したかと思えば、不愉快そうに眉をひそめるだけ。やりきれない気持ちをごまかすために、少しでも声のボリュームを上げる。喉に刺すような痛みが走る。声帯をすり減らすように叫ぶ歌の上に、アコースティックギターの繊細でシャープな音色が覆いかぶさっていく。

なんでそんなこともできないの。母親は弟によくそう言っていた。その時の母親は決まってニコリと微笑んでいた。自分の底知れぬ苛立ちを隠そうとしていたからなのか、歪んだ悪意がそうさせていたからなのか、それはもうわからない。耳が聞こえない弟は母親の優しい表情だけを見て、優しい微笑みを返していた。

② 幸せものだな。僕は弟の表情を見てそう思っていた。可哀想だからという理由で、母親は弟を耳が聞こえる子と同じように育てようと必死に動き回っていた。色んな学校を回って、色んな病院を回って、結局何の成果も得られずに帰宅する。それでも母親は諦められなかった。自分の部屋で声を押し殺して泣いていたかと思えば、次の日にはまた③どこから聞いたのかわからない場所へと飛んでいく。自傷行為とも思える母親の行動を見ていたからこそ、僕は一層悲しかった。母親がそのような言葉をこぼしてしまふことが。弟が、その母親の真意を知ることができず、④残酷に笑ってみせることが。

一曲目が終わり、少しだけ手を休める。右手を見てみると、指先が寒さで赤くなっているのがわかった。遠くから若い男女のしやぎ声が聞こえる。居酒屋帰りのサラリーマンのふざけた喋り声が聞こえる。冬の風が商店街を吹き抜けていき、誰かが捨てたビニール袋が飛ばされていく。夜がふけるにつれ、人通りは少なくなっていく。ぐっと足に力を入れないと、この街の冷えきった底へと引きずりこまれそうになる気がした。僕はズボンの上から太ももの肉をつねる。自分がここにいることを確かめるため。自分を痛めつけるため。

誰にも言うことはできなかったけれど、僕は弟のことが大嫌いだった。弟の聴覚障害が発覚してから家庭の雰囲気は明らかに悪くなったし、母親の苛立ちが自分に向けられることもあった。だけど、ひどいことを言われても、ひどい仕打ちを受けても、いつもへらへらと笑ってみせる弟を見る度に、そんな自分の苦しみがとても小さくてくだらないもののような気がしてならなかった。

僕がギターを始めたのは、決して晴れないもやもやをごまかすためだったのかもしれない。

僕が部屋で一人ギターを弾いていると、不思議と弟はそのことを察知して、僕の部屋に勝手に入ってくる。弟はそのまま目の前に腰掛け、目を輝かせながら僕の指先をじっと見つめてくる。一曲弾き終えたタイミングで僕が、なにか弾いてほしい曲があるかと手話で尋ねると、弟は決まって、向日葵の歌を歌ってほしいとリクエストしてきた。向日葵をテーマにした歌なんて知らなかったから、僕はいつも適当に自分の好きな曲を演奏した。それでも弟は嬉しそうに目を細め、一生懸命両手で手拍子をした。そのテンポのずれた、めちやくちやな手拍子が、今も僕の耳の奥にこびりついて離れない。

二曲目を歌い終え、三曲目を歌い始める。ビデオの早送りをしているように時間が流れ、最後の曲を残すだけとなる。身体が熱くなってきたので、ガウンを脱ぎ捨てる。ちょうどそのタイミングで北風が吹きささび、ぞくりと快感に似た震えが身体を駆け上がった。大丈夫。両腕を手で擦りながら、自分ではない誰かに語りかけるようにつぶやいた。後悔があるとすれば、心残りがあるとすれば、それは多分、弟に向日葵の歌を歌ってあげられなかったこと。⑤それをトラウマだとか、呪いだとかって思えば楽になれるのかもしれない。でも、それは違う。たとえそれが事実だとしても、それは違うと僕は信じていたい。左手でギターの弦を押さえる。視界の端っこで、一人の女性が立ち止まるのが見えた。僕は息を深く吸い込み、最後の曲を弾き始める。

弟は去年の夏に肺炎で亡くなった。葬式会場で母親は、弟の聴覚障害が発覚したあの日と同じくらいに乱れに乱れた。髪をかきむしり、親戚に後ろから身体を押さえられながら、獣のように泣き叫んでいた。やがて疲れ果て、よろけるように遺体が納められた棺へ寄りかかると、「馬鹿なお母さんでごめんなさい」とかすれるような声でつぶやいた。⑥それはずるいよ。僕は喉元までかかった言葉をぐっと飲み込み、母親の震える背中をさすった。僕は顔をあげる。満面の笑みを浮かべた弟の写真の周りを、弟の大好きな向日葵の花が囲んでいた。

静まり返った商店街に乾いた拍手が響く。僕はたった一人の観客に頭を下げ、ギターストラップを肩から外した。どうでした。世間話のつもりで何気なく彼女に尋ねてみる。彼女は戸惑いながらも、酔いで少しだけ火照った頬をほころばせながら言う。

「もちろん悪くはなかったですけど……正直、あなたよりも歌が上手い人は他にも沢山いるって感じだし、それになにも少しだけ間を空けた後、彼女は少しだけ呆れたような口調で言葉を続けた。

「こんな真冬に向日葵の歌って、季節外れも良いところじゃないですか？」

その通りですね。僕は可笑しくなって、笑いを漏らす。マイクスタンドを折りたたみ、地面に脱ぎ捨てた上着を拾い上げる。ギターケースを開け、使い古され、所々穴の開いたクッションの上に自分のギターを横たえる。

「でも、一人くらい……一人くらいは、こういう町の隅っこで、季節外れの歌を歌ってる人がいても良いと思いますよ」

僕は自分だけに聞こえる声で、そうつぶやいた。女性客は背を向け、そのまま立ち去っていく。僕は彼女の背中を見送りながら上着を羽織り、その上からギターケースを背負った。ポケットに入れていた手袋を両手にはめ、無地のマフラーを首に巻く。身体を揺り動かし、疲労のせいで重たく感じる背中のギターケースの位置をずらす。イヤホンを耳にはめ、昔から聞いているお気に入りのミュージシャンのアルバムを再生する。きつとまた来週のこの時間、同じ場所で、僕は歌うだろう。それがいつまで、そして何のためなのかはわからないまま。ふと上を見上げると、水銀灯の一つが明滅し、切れかかっているのに気がつく。夜空の色は濃さをまし、星の瞬きが少しだけ良く見えるようになっていた。そして耳を澄ませばかすかに、⑦夜空へと吸い込まれていった向日葵の歌が聴こえるような気がした。

〔注〕 *1 ペグⅡ弦を調節する部分。

*2 チューニングⅡ音の高さを調整すること。

（『余命3000文字』より「向日葵が聴こえる」 村崎 羯諦）

イ 聴覚障害者が完治を目指して治療に専念し、一般の人々以上に社会で活躍できるようになる場所。

ウ 聴覚障害者が障害者として快適に日常生活を送り徐々に自立していけるよう、支援者がそろっている場所。

エ 聴覚障害者が特別扱いされず他の子と一緒に過ごせたり、少しでも聴覚を回復できたりする場所。

オ 聴覚障害者が少しでも心の痛みを和らげられるよう、障害者同士がコミュニケーションをとれる場所。

問四 | 線④「残酷に笑ってみせる」とありますが、母にとってどういう意味で残酷だと僕は感じているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何も気づいていない弟の笑顔は、弟のために冷静に対処する母にとって、少しも成果が出ないことを皮肉に責められているようなものとなっている。

イ 自分のために必死になってくれている母を励まそうと笑顔を作る弟の姿は、時に苛立たしきを感じてしまう母にとって、心を締め付けられるものとなっている。

ウ 状況を分かりつつも自分ではどうすることもできず笑顔を作るしかない弟の姿は、何もしてあげられない母にとって、いっそうむなしさを感じさせるものとなっている。

エ 何も事情が分かっている弟の純粋な笑顔は、高ぶった感情を弟に直接ぶつけてしまう母にとって、余計にその感情を刺激するものとなっている。

オ 母の笑顔をその通りに受け止めて、優しく接してくれていると思っっている弟の笑顔は、母にとって弟の聴覚障害という現実を突きつけられているようなものとなっている。

問五 ー線⑤ 「それをトラウマだとか、僕は信じたい」とありますが、この時の僕の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 向日葵の歌を歌ってあげられなかったことを思い出すと、弟に責められている気がして胸が苦しくなるが、乗り越えて気にしないことが弟への償いだと思いたい。

イ 向日葵の歌を歌ってあげられなかったのは忘れられないことだが、そのことに縛られているからではなく今は自分の意思で歌っているのだと思いたい。

ウ 向日葵の歌だと信じて喜んでいた弟の姿は強烈な印象として残っているが、それを忘れることなく生きていくことが自分の人生の戒めになるのだと思いたい。

エ 向日葵の歌を歌ってほしいという弟の望みは大したことのない日常的なものであったが、そんな日常の小さなことも自分は決して忘れてはいないと思いたい。

オ 向日葵の歌と信じて手をたたく弟の姿が鮮明に残っているのは気重ではあるが、自分のかつての行動を導いてくれた大切なものであったと思いたい。

問六 ー線⑥ 「それはずるいよ。僕は喉元まででかかった言葉をぐっと飲み込み、母親の震える背中をさすった」とありますが、この時の僕の様子説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ごめんね」の一言だけでは済まされないような、今までの弟に対する母の冷たい態度をひどいと思っている。

イ 一生懸命弟のために駆け回っていたのだから、謝罪する母を責めたらいつそう苦しめることになると思っている。

ウ 今ここで謝罪する姿に違和感を覚えながらも、苦勞を知っているので、自らを責めている母を慰めようとしている。

エ 弟の人生のはかなさを謝るだけで片づける母は、簡単にその場から逃げています。

オ 母が謝罪して先を越されたと思いつつも自分の気持ちも代弁してくれているのでありがたいと思っている。

問七 ―線⑦「夜空へと吸い込まれていった向日葵の歌が聴こえるような気がした」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 天の星になっていて弟に向かって本当の向日葵の歌を届けたことで、適当な歌でごまかしていたということを自白したことになるので、弟にやつと謝れたような気がした。

イ 弟に向日葵の歌を歌ってあげられなかったということがずっと呪いとしてのしかかっていたが、天にいる弟に届いて、ようやくその呪いから解放されたような気がした。

ウ どんなに観客から温かい拍手をもらえなくてもそれに耐え、根気よく路上で向日葵の歌を歌い続けることで、弟への本当の愛情を伝えることができたような気がした。

エ 向日葵の歌を歌ってほしいと言っていた弟に対して、いい加減に対応してきたことへの後悔がずっとあったが、今になって、天にいる弟にその歌が届いたような気がした。

オ 以前は弟を恨んでいたが、弟の方がよほど苦しかっただろうということがわかってきて、寒さに耐えて歌った向日葵の歌を通じて苦しみを分かち合えたような気がした。

問八 本文の表現の特徴として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在と過去の時間が入り混じった形で描くことで、現在の僕の心境に至るまでの経緯を暗示している。

イ 色を表す言葉を多く用いることで、弟の生前と死後における僕の心の微妙な変化を暗示している。

ウ 寒さを強調する表現を点在させることで、弟に対して次第に強まる僕の心の冷たさを暗示している。

エ ひとり寂しく路上で演奏する様子を描くことで、僕がむなしい日々を送っていることを暗示している。

オ 会話の形ではなくあえて一人語りの形で表現することで、弟を失ってしまった僕の孤独感を暗示している。

問九

僕自身が考えている、僕がギターを弾き始めるようになった理由と、本文全体から読み取れる、路上演奏をし続ける理由を九十字以内で説明しなさい。

